

真宗大谷派における「少年団訓練日曜学校幹部養成所」の開設

松岡悠和

(京都府立大学大学院生)

1. はじめに

1930年代前半、各宗派の仏教日曜学校でボーイスカウトを導入し、あるいは少年団を組織する動きが活発になる。本稿の目的は、ボーイスカウトと宗教団体の関係を解明する基礎作業として、仏教団体が少年団を組織していく過程の一部を明らかにすることである。

1922(大正11)年に発足した少年団日本連盟は、1920年代を通して少年団の普及、組織の拡大を推し進めた。しかし1930年代前半には、満州事変後の反英國の世論や、1932(昭和7)年の三指礼問題、同年の文部省訓令「児童生徒ニ対スル校外生活指導ニ關スル件」、1934(昭和9)年の帝国少年団協会創立など、少年団日本連盟にとっては厳しい時期が訪れる¹。他方、この時期に、浄土真宗大谷派や同本願寺派、浄土宗は、本山の主導で組織的にボーイスカウト運動を推進しはじめる。それを受けた少年団日本連盟は、1934(昭和9)年、加盟規則を次のように改正する²。

第九条 同宗派ニ属スル加盟団ニシテ地方連盟ノ地域二個以上ニ亘リ連絡体ヲ組織セントスルトキハ本連盟ノ承認ヲ経ルヲ要ス〔後略〕

この改正によってはじめて、少年団日本連盟の規約類に宗教教団に関わる文言が追加された。少年団日本連盟が、上述の宗団による少年団組織化の動きを積極的に認めたものだと考えられる。

ボーイスカウトと宗教団体の関係についての研究は、1930年代前半、いわば少年団日本連盟にとっての動搖期における少年団運動の実相を明らかにしていく上でも、欠かせないものである。京都には多くの仏教教団の本山があることから、京都の事例検討は、ボーイスカウトと宗教団体の関係を解明する一つの手がかりになる。

京都におけるボーイスカウトの歴史をまとめたものには、日本ボーイスカウト京都連盟の『七十年のあゆみ』があるが、戦前については簡単な年表があるだけで、主な内容は戦後の事柄である³。他に、日野照正が本願寺派の龍谷少年団の歴史をまとめているが⁴、その他の宗派が少年団を組織していく過程については未解明の部分が多い。

東本願寺を本山とする浄土真宗大谷派と、西本願寺を本山とする同宗本願寺派はともに、1930年代にボーイスカウト運動を展開させた教団で、それぞれ大谷健児団や龍谷健児団を組織していく。1932(昭和7)年の夏、大谷派教学課ははじめての「少年団訓練日曜学校幹部訓練所」を、本願寺派社会部は「第1回本願寺指導者教習所」を開設する。これらの動きは、少年団組織化的端緒といえるが、従来の仏教日曜学校組織を基盤とするものであった。

真宗大谷派や真宗本願寺派、浄土宗などは、少年団の組織化にあたり、既存の仏教日曜学校を活用した。仏教日曜学校の教師らにボーイスカウトの教育方法を身に着けさせ、仏教日曜学

校にその方式を導入し、あるいは少年団を組織しようとした。したがって仏教教団がボーイスカウトを採用する経緯を明らかにするには、指導者養成の実態を解明することが重要になる。以下では、真宗大谷派を事例に、大谷派教学課が1932(昭和7)年7月26日から30日にかけて「少年団訓練日曜学校幹部養成所」を開設した経緯とその内容について考察する。

2. 大谷派日曜学校とボーイスカウトの接点

(1) 少年団日本連盟実修所への参加

大谷派日曜学校界にはじめてボーイスカウトが紹介されるのは、1931(昭和6)年の「日曜学校教師並に幼稚園保姆講習会」である。真宗大谷派教学課主催の同講習会は、1931(昭和6)年5月30日から6月3日までの5日間にわたり、大谷中学校を会場に開催された。その中で、中野忠八が「ボーイスカウトに就て」という題の講義を行う⁵。中野忠八は、全国に先駆けて1915(大正4)年に京都少年義勇軍を組織した人物で、この当時は少年団日本連盟地方委員、少年団京都地方連盟理事長という肩書を持っていたが、大谷派の門徒でもあった⁶。

中野は、ボーイスカウトに興味を示した日曜学校教師に、少年団日本連盟主催の指導者実修所に入所するよう勧めた。真宗大谷派日曜学校連盟理事の小山乙若丸と教学課嘱託の藤田正雄は、中野の講義の2ヶ月後、広島県巣島で開かれる中国地方実修所に参加する⁷。実修所は7月25日から31日にかけて7日間のキャンプ生活で、ほとんどの参加者は少年団指導者が過去にも実修所に入所している経験者だった。小山や藤田のような未経験者は珍しかったが、小山らは参考書の取り寄せも間に合わず、定められた予習もしないまま参加したという⁸。実修所を通して小山は、日曜学校の活動に結びつく營火童話や唱歌に関心を示した他、次のように考えていた⁹。

私は一昨年〔引用者註：1931年〕、日本連盟の実習所へ入ってみたとき、非常に益するものを得ると共に、又大きな疑問をも抱いた。〔中略〕このボーイスカウトは、只本の上計りでなく、是非一度は、実習所へ入つた上か、若くは、実習所を出た人の指導によつて、実際を、暫くやつた上でなくては、実際児童に課すべきものではない。

〔中略〕要は教師が、実地に入つた研鑽の上で、案を立てられるべきものである。予習なく実修所に飛び込んだことから得た教訓ともいえるが、小山はボーイスカウトを実践するにあたり、指導者養成が重要であると考えていたことが分かる。

(2) 日曜学校界へのボーイスカウトの紹介

小山と藤田はそれぞれ、真宗大谷派日曜学校連盟が毎月発行していた機関誌『児童と宗教』の前編集者、現編集者であった。『児童と宗教』誌上では、1931(昭和6)年12月号に、中野の文章を引用した3編の囲み記事が載っている¹⁰。中野忠八『ボーイスカウト訓練の大綱』から「スカウトの自覚」「ボーイスカウトの目的」「ボーイスカウト訓練と宗教との関係」の節を抜き出している¹¹。当時、少年団関係者が宗教に関心を向けることは多くなかったが、『児童と宗

教』編集者の藤田は、宗教に目を向けている中野の文章を選んだのだろう。

さらに藤田は、『児童と宗教』でボーイスカウト特集を組む構想も持っており、1932(昭和7)年2月号で「次号をボーイスカウト号にするつもりである」と述べた¹²。ただし藤田の構想は、このときには実現しなかった。一つには、4月に行われる花祭りに向けて児童劇にしてほしいという意見が多く寄せられた事情がある¹³。もう一つの大きな理由は、藤田が軍隊へ入ったということである。『児童と宗教』の編集は、清谷聖水¹⁴に託されることになり、藤田が直接、自由に誌面を編集することができなくなった。藤田が満州に渡ってからは、実践現場に臨むこともなくなったが、少年団関連の論文や日曜学校の教案を寄稿するなど、日曜学校におけるボーイスカウトの導入ないし組織化を理論面で支えていくことになる¹⁵。

日曜学校関係者がボーイスカウトについて検討するにあたり、既に大谷大学生を中心に大谷大学健児団が組織されていたことも助けとなった。1932(昭和7)年1月18日に大谷大学日曜学校研究会が開いた日校教師懇談会では、ボーイスカウトが話題に上った。1月27日には、大谷健児団が日校関係者懇談会を主催し、日曜学校とボーイスカウトの連携について討議、研究している¹⁶。おそらくこれらの場で、日曜学校の講習会に、ボーイスカウト訓練を採用する構想が生まれたのではないかと推測される。同年5月頃から具体的に、教学課主催の日曜学校幹部養成所の計画が、大谷大学健児団の協力の下、進められることになる。

3. 「少年団訓練日曜学校幹部養成所」の開設

(1) 教学課による開設計画と準備

京都を拠点とする宗教新聞『中外日報』は、1932(昭和7)年5月28日付けの記事「大派で日校幹部養成所 開設計画 京都近郊の森林で—キャンプ生活を営んで」で次のように伝えた。「近郊の森林の中にキャンプ生活を営んで、今夏七月下旬又は八月上旬に於いて約一週間日曜学校幹部養成所を開設したいといふ計画の下に大谷派教学課では目下そのプランを作製中の模様である」¹⁷。

養成所計画の前段階として、6月4日、5日に大谷派教学課職員、日曜学校教師、大谷大学健児団合同のキャンプが行われた。教学課から円山千之と清谷得龍、日曜学校連盟から野間修と小山乙若丸、大谷大学健児団から団員10名と団長の重永潛が参加するなど、総勢16人が参加した¹⁸。4班に分かれて指導員の予習・訓練、研究がなされ、夜のキャンプファイアでは班ごとの余興が披露された。その様子は『中外日報』や『文化時報』でも報じられ、「開設計画の実際的準備打合を、大谷健児団指定の洛西原谷の丸山森林内キャンプ場に於て行ふ」などと伝えられた¹⁹。さらに教学課と大谷大学健児団は、打ち合わせのため、7月2日に再度、合同キャンプを行おうと計画していたが、これは豪雨により中止になった²⁰。

養成所は7月26日から30日まで、京都原谷の釀迦ヶ谷で開かれることになった。6月の合同キャンプを皮切りに、開設に向けて教学課では急ピッチで準備が進められる。募集要項は7月1日発行の『文化時報』や7月5日発行『真宗』、7月7日発行『児童と宗教』などで発表さ

れた²¹。7月15日までに申し込まなければならなかつたので、参加者の準備もかなり慌ただしかつたと想像できる。

(2) 「少年団訓練日曜学校幹部養成所」の開設

募集には29人の講習希望者が集まり、指導員11人（【表1】）と合わせて総勢40人で養成所が開かれた。参加者は【表2】の通り、動物の名前の6班に分けられた。大谷大学健児団の団員が各班のリーダーとして配置され、養成所のキャンプ生活が円滑に進むよう働いた。彼らは数日前から大学に泊まり込み、準備・訓練していたという²²。前日25日には会場へ赴き、講堂・本部設営、備品準備等も行っている²³。

1932(昭和7)年7月26日、講習員29名は東本願寺に集まり、訓練服を受け取って開所式に臨んだ。会場となる釈迦ヶ谷までは、電車と徒步で移動した。13時に到着してから、各班はキャンプサイトを設営する。

忙しいぞ、先づ第一番に天幕を張る地面の雑木を刈り取り、手入れしなければならない。それが出来ると、天幕を、倉庫天幕を、便所を、夕食の仕度を、仕度をしながらも今夜の營火の出し物を考へねばならない。忙しい／＼²⁴。

訓練・作業の忙しさは、期間を通して徹底的なものだった。休憩時間が、キャンプサイトを改善する「閑時作業」に充てられるなど、「五日間の間一瞬の午睡も与へられず講義に実習に訓練に作業に厳格すぎる程厳格に実行」された²⁵。それは班のモットーにも表れ、虎班は「勤労」、獅子班は「唯働く」と定めていた²⁶。

小山と藤田によるイスカウトを紹介した、少年団日本連盟の中野忠八も、本養成所の講師として関わっている。中野は3日目に、午前、午後を通して3講義を行ったが、その合間にスカウトゲームも実演した²⁷。

講義の合間のキムスゲーム——二級健児の考查
(十三、四歳)——では合格点に達した者僅かに三、四名このゲームは机上にマツチ、時計、銭、笛等廿四個の雑品を並べ一分間注視せしめた後之を記録せしめ十六品以上正確に記録した者を以て合格点とするので注意と観察を練習するゲームであるあたら大男若年の健児にも及ばざるか

少年の興味をひくためには、ゲーム中心の訓練を活用することが大切だと指摘された。それらを実際に活用する効果的な方法が、4日目に行われる行脚(ハイキング)である。

【表1】大谷派教学課主催
日曜学校幹部養成所 指導員

役務	名前
所長	一柳 知成
隊長	朝倉 慶友
副隊長	重永 潜 *
指導員	円山 千之 *
同	野間 修
同	小山 乙若丸 *
同	山本 正文
同	清谷 得龍 *
同	杉村 成仁
同	日野 了含
講師	中野 忠八

*は6月の準備キャンプ参加者

「四日間に亘つて受けた全ての総決算とも云ひつ可き行脚の旅に上る」²⁸。室町時代の東山道という想定の下、参加者らは源氏の侍になりきって、約 12km の道のりを 5 時間かけて歩く。途中、5 つの関所が設けられ様々な課題が試される。第 1 に動物の石膏作り、第 2 に仮装、第 3 に包帯の手当、第 4 に即興の詩歌、第 5 にスカウトのおきて 10 ヶ条、これらの課題によって、スカウトとしての能力やセンスが問われた²⁹。その他、5 日間に行われた講義は【表 3】の通りである。

【表 2】日曜学校幹部養成所 講習員班編成

虎班	藤本 太一 *	以下 4 人
獅子班	服部 琢磨 *	以下 5 人
鷹班	松田 進 *	以下 5 人
熊班	中川 昇	以下 5 人
鷗班	河合 英美 *	以下 5 人
燕班	金松 賢諒 *	以下 5 人

*は前日準備を行った大谷大学健児団員

(3) 講習・訓練内容の特徴

戦前日本の少年団運動について研究している田中治彦は、日本の様々な少年団がイギリスのスカウティングの方法論をどのように採り入れたか、あるいは拒んだのかを分析するために、4 つの要素を用いた。①宣誓とおきて、②斥候術とウッドクラフト、③バッジ・システム、④パトロール・システム³⁰。本項では以上の観点に基づいて、養成所の講習・訓練の特徴を考察する。

① 宣誓とおきて

宣誓とおきては、少年団日本連盟の中身をそのまま導入しており、朝倉慶友や重永潜が講義している。上述のようにハイキングの課題でも、おきての 10 項目を詠んじられるかが試された。宣誓・おきての暗唱は、日本の少年団に共通して見られる教育方法だったが、本養成所でも同様に採り入れられた。

宣誓というボイスカウトの中心的イデオロギーが、真宗精神に結びつけて語られたことは本養成所の特徴である。従来の仏教日曜学校とは全く異なる形態の教育方法を採用するにあたり、ボイスカウトの位置づけを明らかにしておくことは、当然必要だった。隊長の朝倉は「少年団の宣誓三ヶ条が我が真宗の教義に全く合致してゐる」と述べている³¹。

② 斥候術とウッドクラフト（野外生活）

ハイキングやキャンプの方法は、日本の多くの少年団で採り入れられたが、本養成所でもハイキングやキャンプが中心であったことは前項で述べた。4 日目のハイキングで、源氏の侍となって東山道を歩くという想定は、まさに斥候そのものといえよう。また各班のキャンプサイトでは、趣向を凝らした野外工作がなされた³²。

どの班でも夫夫の趣向になる門や生垣を造つてゐた。〔中略〕鷹班では樹枝で組んだ食卓に笹の葉の天蓋を造つたりしてあつた。原始味とモダンの交錯だ。鷗班では地を斜めに掘下げて青い樹葉などを一ぱいに入れた冷蔵庫（？）を造つたりしてゐた。

また、特筆すべきは、毎晩の営火（キャンプファイア）に力が入れられていたことである。営火は、6月の合同キャンプの晩にも行われたが、養成所でも毎晩行われた。たとえば初日は次のような出し物が披露され盛況だったようだ³³。

鷗班、鷗の歌、劇池の蛙と道の蛙。熊班、歌僕は軍人、劇熊と旅人。燕班歌愉快な健児、劇足柄山。獅子班歌兵隊さん、劇河原町所見鷹班歌日の丸の歌、劇桜井の決別、虎班歌虎班々歌、劇指導蔓外道以上各班共全力を尽して力演せり

4日目の晩にも、「虎班ではやんちや連が巨大な『虎』のカブリモノを舞はして」余興の練習をしていることから、毎晩趣向を凝らした出し物を準備していたことが分かる³⁴。小山は実修所で営火に興味を示していたが、所長の一柳も「キャンプ、ファイヤーの賛美者である」と言っていた³⁵。営火で行われる歌や劇は、従来の仏教日曜学校活動でも中心的な内容であったことから、日曜学校関係者に受け入れられやすい側面があったと考えられる。

③ バッジ・システム

バッジ・システムすなわち進歩制度は、少年団日本連盟以外ではほとんど採用されず、少年団日本連盟においてすら、導入に日時を要した。本養成所では、中野や山本正文が講義を行った他、二級健児考查課目のキムスゲームが紹介されている。ただしこの段階ではまだ、制度がどこまで確立していたのかは定かでない。

④ パトロール・システム

班制度に基づく小集団指導の方法は、当時最も革新的な方法で、それゆえ日本の各少年団によって採否は大きく分かれ、また理解にも困難が伴ったという。その班制度を本養成所はたいへん重視した。

少年団は班精神を尊重する。班は最大限度の人員を八名とし、それ以上を超過する場合は完全なる班を組織し得ないと居る。〔中略〕班員中より班長、次長を定め、以て班精神発揚の責任者となすのである³⁶。

キャンプ生活も、ハイキングも、営火も、すべてにわた

【表3】日曜学校幹部養成所 講義一覧

	講題	講師
7月26日	真宗と少年団の宣誓	朝倉 慶友
	本訓練所開設の目的	同
7月27日	少年団の編成	小山 乙若丸
	宣誓とおきて	重永 潜
	班制	小山 乙若丸
7月28日	合図	中野 忠八
	労作教育としての健児教育	同
	進級制度	同
7月29日	特技章	山本 正文
	行脚に就いて	野間 修
	記号、測量、急救〔ママ〕	同
	宗教々育について	同
7月30日	野営法	中野 忠八
	少年団運動の文化的意義	重永 潜
	真宗少年団の将来	野間 修

り班ごとの活動であった。また、毎日の点検・講評の際に優秀班を表彰していたのも、班精神を高揚させるものだったといえる。本養成所でパトロール・システムを重視し、適用できたのには、中野の影響が大きい。中野は1924年に第2回国際ジャンボリーに参加し、そこで実際にパトロール・システムを見てよく理解していた³⁷。また、大谷大学健児団の経験者が各班の班長に任命されていたことも、パトロール・システムを機能させる助けになったはずである。

4. むすびにかえて

中野忠八によって大谷派の日曜学校界にボーイスカウトが紹介されてから、教学課によって少年団訓練日曜学校幹部養成所が開かれるまでの経緯と、その訓練の内容について見てきた。中野が日曜学校関係者らにどこまで期待していたかは定かでないが、1932年の養成所については、充実した内容で、イギリスのボーイスカウト、あるいは少年団日本連盟の方法を忠実に採用している。開設にあたって「純粹のボーイスカウトシステムで行ふ」と宣言されたが、まさにその通りだったといえる³⁸。

その上で、本養成所の特色を挙げるならば、一つには、宣誓などイデオロギ一面で真宗の教義との接続を試みたことがある。大谷派では後に、「大谷健児団」を組織し、少年団日本連盟に加盟しながらも、宗教少年団として独自の位置を確立しようと模索していく。それにはボーイスカウトのイデオロギーを、真宗なりに、大谷派なりに解釈しなおす作業が不可欠だが、本養成所はそのうちの一つだったのではなかろうか。

もう一つの特色は、技術的な面で、キャンプファイアを非常に重視していたことだ。キャンプファイアでの出し物は、仏教日曜学校で行われてきた、おとぎ話、歌、劇などと直接結びつくもので、日曜学校教師にとっては本領発揮の絶好の機会だったかもしれない。

1932年に大谷派教学課が主催した、少年団訓練日曜学校幹部養成所は、仏教日曜学校とボーイスカウトが、精神面でも、技術面でも結びつくことを示すものであった。しかし両者の接続は、後に大谷健児団の組織に関わる実際運営上の問題として議論されることになる。仏教日曜学校とボーイスカウトをめぐるこの問題については、稿を改めて検討したい。

註

¹ 田中治彦『少年団運動の成立と展開—英国ボーイスカウトから学校少年団まで—』九州大学出版会、1999年。

² 「連盟公報」「少年団研究」第11巻第3号、少年団日本連盟、4頁。

³ 日本ボーイスカウト京都連盟創立70周年記念誌事業部が『七十年のあゆみ』日本ボーイスカウト京都連盟、1986年。

⁴ 日野照正『本願寺（派）スカウトの源流』『本願寺（派）スカウトの源流』刊行委員会、2003年。

⁵ 『真宗』第357号、大谷派宗務所社会課、1931年、11-12頁。

⁶ 日野、前掲、55頁。

⁷ 「連盟公報」「少年団研究」第8巻第8号、1931年、2頁。

- 8 小山乙若丸「中国地方実修所入所雑感」『少年団研究』第8巻第8号、1931年、28頁。
- 9 小山乙若丸「日校雑感」『児童と宗教』第12巻第3号、1933年、3-4頁。
- 10 『児童と宗教』第10巻第12号、真宗大谷派日曜学校連盟、1931年、7頁、12頁、23頁。
- 11 中野忠八『ボーイスカウト訓練の大綱』少年団日本連盟パンフレット第6輯、少年団日本連盟、1925年。「スカウトの自覚」は、引用部では直接宗教に言及していないものの、原本には続きがある。「一つの宗教、特に比較的新しく興つた宗教運動に於て、その信者のもつて居るよき且つ強き心理状態は恰かも茲に言ふ所のスカウトの心理と一致するものであらうと思ふ」(7頁)。
- 12 まさを「編輯室より」『児童と宗教』第11巻第2号、1932年、21頁。
- 13 清谷「編輯室より」『児童と宗教』第11巻第3号、1932年、26頁。
- 14 「清谷聖水」「きよみ」と署名されている史料のなかで、清谷得龍(後述)の筆によるのではない
かと推測される文章が散見されたが、現段階では同定できないため、本稿では史料に即して表記
する。
- 15 『児童と宗教』第11巻第3号、1932年、32頁。
- 16 同上、33頁。
- 17 「大派で日校幹部養成所 開設計画 京都近郊の森林で—キャンプ生活を営んで」『中外日報』1932
年5月28日、2頁。
- 18 「大派日校関係者の一夜キャンプ」『文化時報』1932年6月7日、3頁。
- 19 「けふ原谷森林でキャンプ生活 大谷健児団や本山役員日校当事者が——」『中外日報』1932年6
月4日、3頁。
- 20 『中外日報』1932年7月3日、2頁、『文化時報』1932年7月3日、3頁。
- 21 「大谷派で開設する日校幹部養成所 洛北でキャンプ生活を行ふ」『文化時報』1932年7月1日、
3頁、「日曜学校幹部養成所開設」『真宗』第369号、1932年、「日曜学校幹部養成所開設」『児童
と宗教』第11巻第7号、1932年。
- 22 「大谷派日校幹部養成所いよいよキャンピング」『中外日報』1932年7月24日、2頁。
- 23 清谷得龍「少年団組織の必要と日校幹部養成所詳記」『児童と宗教』第11巻第10号、1932年、
10頁。
- 24 清谷得龍、前掲、11頁。
- 25 円山「大谷派日校幹部養成所(第五報) キャンピングだより」『文化時報』1932年8月3日、3
頁。
- 26 清谷得龍、前掲、11頁。
- 27 円山「大谷派日校幹部養成所(第三報) キャンピングだより」『文化時報』1932年7月31日、3
頁。
- 28 清谷得龍、前掲、13頁。
- 29 円山「大谷派日校幹部養成所(第四報) キャンピングだより」『文化時報』1932年8月2日、3
頁。
- 30 田中、前掲、217頁。
- 31 「大派日校幹部養成所終る」『中外日報』1932年7月31日、2頁。
- 32 「キャンピング謡歌 原始的な冷蔵庫 釧路ヶ岳に文覚現はる……大派日幹養成所を訪ぶ(B)」『中
外日報』1932年8月3日、3頁。
- 33 「大谷派日校幹部養成所(第二報) キャンピングだより」『文化時報』1932年7月30日、3頁。
- 34 「キャンピング謡歌 原始的な冷蔵庫 釧路ヶ岳に文覚現はる……大派日幹養成所を訪ぶ(B)」、3
頁。
- 35 「真宗雑記」『中外日報』1932年7月3日、2頁。

³⁶ 清谷得龍, 前掲, 10 頁。

³⁷ 田中, 前掲, 224 頁。

³⁸ 『無尽灯』第 7 号, 大谷大学同窓会本部, 1932 年, 56 頁。

参考文献

佐賀枝夏文「『児童と宗教』解説」「『児童と宗教』解説・総目次・索引」不二出版, 2013 年。

スカウト運動史編さん特別委員会編『日本ボーイスカウト運動史』ボーイスカウト日本連盟, 1973 年。

寺岡一義編『昭和七年度版少年団日本連盟加盟団名簿』少年団日本連盟, 1932 年。

寺岡一義編『昭和十二年度版大日本少年団連盟加盟団名簿』大日本少年団連盟, 1937 年。

【参考】日曜学校幹部訓練所 講習員名簿

班	名前	第2回参加者
虎班	藤本 太一	
	小串 研受	○
	山田 文正	
	結城 純明	
獅子班	服部 琢磨	◎
	寺西 裕	
	加藤 守	○
	峰谷 教樹	○*
	加藤 保昌	○
鷹班	松田 進	
	河地 覚導	○
	大久保 見道	◎
	吉本 行善	
	桃井 励寿	○
熊班	中川 昇	
	金光 昇丸	
	吉水 雄彦	
	橘 了法	
	宮原 一乗	
鷗班	河合 英美	◎
	北条 秀雄	
	網田 義雄	
	南賀 助一	
	岡部 泰尊	
燕班	金松 賢諒	
	土井 淳信	
	福島 嘉寿	
	市江 葆林	
	宮川 専成	

参考に、教学課主催第2回仏教少年団幹部養成所の参加者も示した。

凡例 ○…講習員として参加

◎…本部員として参加

* 第2回の名簿に「峰屋教樹」の名が見られるが、同一人物ではないかと推測される。

【年表】

筆者作成

年	月	日	事項	社会の出来事
1931	5-6	30-3	日曜学校教師幼稚園保姆講習会ひらかれる。中野忠八「ボーイスカウトに就て」講義おこなう	9) 満州事変勃発
	6		大谷健児団（大谷みやこ健児団）少年団日本連盟に加盟登録する	
	7	25-31	小山乙若丸・藤田正雄、少年団日本連盟中国地方指導者実修所（室ヶ浜）に入所する	
1932	1	18	大谷大学日校研究会主催日校教師懇談会ひらかれる	5) 五・一五事件 12) 文部省訓令「児童生徒ニ対スル校外生活指導ニ関スル件」
	1	27	大谷健児団主催日校関係者懇談会ひらかれる	
	6	4-5	教学課・大谷大学健児団、合同キャンプ（丸山森林）おこなう	
	7	2	打ち合わせキャンプの計画、雨のため中止される	
	7	26-30	教学課主催少年団訓練日曜学校幹部養成所（糸迦谷）ひらかれる	
	10		大谷中学校健児団、少年団日本連盟に加盟登録する	
	11	27	大谷派健児団連盟京都支部、結盟式ひらく	
1933	1	2	大谷派健児連盟京都支部、始年大会おこなう	8) 文部省主催第1回校外生活指導講習会
	5		大谷金星健児団・大谷闡彰健児団、少年団日本連盟に加盟登録する	
	7	3-8	教学課主催第2回仏教少年団幹部養成所（長尾山）ひらかれる	
	7	10-14	大谷大学健児団、カレヂ・スカウト訓練所（長尾山）ひらく	
	8		教学課「青少年教化施設条規」「大谷健児団規程」さだめる	
	11		『児童と宗教』改題し『青少年と宗教』になる	
	12		大谷大学健児団、少年団日本連盟に加盟登録する	

『スカウティング研究』第20号

2019年5月20日 発行

発行者 スカウティング研究センター

編集・発行責任者 中島 豊

〒386-0025 長野県上田市天神4-18-13

e-mail nakajima@nagano.ac.jp
